

[ひつじときつね]

[基本CG12枚・総数97枚]

魔戒九刻
レアリア

—Greed clayear Fox Nine—

人の世には常に様々な『欲』が存在している。

そして、膨らみ溢れ煮詰まった『欲』は異形の姿を得て世に放たれる。

それこそが『欲獣』。

生まれ落ちた欲獣はその身を形作る欲を具現化した似姿を取る。

そして、その身に宿した欲を満たした時、欲獣は浄化され世から消える……。

時代によって様々な欲獣が産まれた。

戦乱の時代には『生存欲』

飢餓の時代には『食欲』

発展の時代には『出世欲』

そして……衣食住が満たされ、

様々な疫病・戦乱を克服し、

人々がそれぞれ自分の居場所を持つ

平和で満たされた時代に産まれた欲獣は……

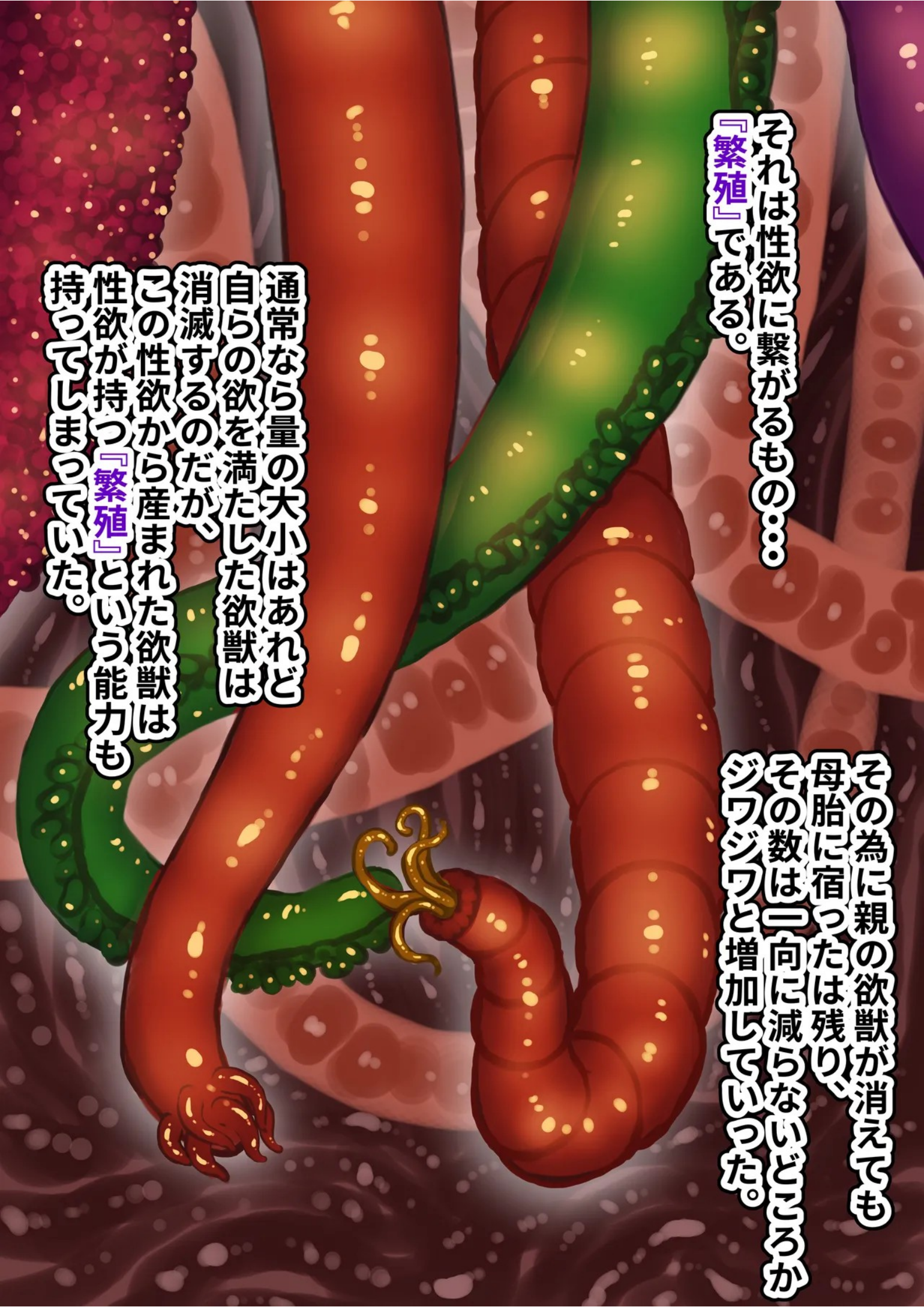


『性欲』だった。

この欲獣にはそれまでのモノと違い
厄介な点があった。

それも……普通では満たされぬ
暗く鬱屈した類のモノだ……。

その心の底に澱のように溜まった
醜い欲望が増殖じ、溢れ出し、形を得て
蠢き始めた。



それは性欲に繋がるもの……
『繁殖』である。

通常なら量の大小はあれど
自らの欲を満たした欲獣は
消滅するのだが、
この性欲から産まれた欲獣は
性欲が持つ『繁殖』という能力も
持つてしまっていた。

その為に親の欲獣が消えても
母胎に宿ったは残り、
その数は一向に減らないどころか
ジワジワと増加していった。

しかしそれを阻止せんと
戦う者がいた。

マジカルサイン

『魔祓九刻レアリア』

まだ世のおもてには
出てきていないが
確実に人の世を
蝕み始めた欲獣を

たった二人で闇から闇へと葬って行く。



欲獣も彼女の存在もまだ
世間にはほとんど知られて
いない。

ましてや彼女が
どこの誰であり、

そのような力を
なぜ持っているのか

そんな事を知っている者はおらず、
それを気にかける者も皆無であった。



しかし、誰に知られるわけでも無いが彼女は強かった。

すでに葬った欲獣の数は数百を数えていた。

それでも、欲獣が減っている気配は少しもなかった。

いや、むしろ以前よりも増えているようにすら感じられていた。

そして、活動規模と比例するようにその強さは明らかに増じていた。

それでも彼女は欲獣を葬っていた。葬って、葬って葬って葬って葬って葬って。





敗

そ

け

し

た

て

敗けた、敗北した。
油断はなかった。
勝算も十二分にあった。

それでも、敗れた。
初めての敗北だった。
なぜ負けたのかは明白だった。
単純に、相手の数が多かったのだ。

多かつた。。。いや多すぎた。
次から次へと湧き出す欲獸。
その異常な量に気づいた時
にはすでに四方八方を囲ま
れた後だった。。。。

A red curtain with the text "Butt" and "Butt" written repeatedly in a stylized, bubbly font. The text is white with a pink outline and is arranged in a vertical column. The curtain has a yellow border at the top and bottom.

体に絡みつかれ身動きは
完全に封じられた。
殺されることがないのは
分かっていて。
なぜなら、ヤツらの目的は
あくまで自らの欲望の
発散なのだ。。。

ギリギリと体を締め付ける
欲獣に抵抗を試みるが
まるで歯が立たない。

大量の欲獣を相手にして
すでに力はほとんど
使い果たしていた。

い逃通
まわ堂

通常であれば難なく吹き飛ばし
逃れられるような拘束ですら
いまは全く抵抗できない。

（なんとか……力が回復するまではガマンしないと……!!）

相手はこちらを殺そうとはしない。
しかし、それがもたらす結果は
女としては到底受け入れがたい。

「変なところを……さわらないで……!」

触手が執拗にレアリアの股間を愛撫する。

染み出た粘液が股布をジツトリと濡らす。

「ずっと覚悟はしてきたんだから

こんなことぐらいで……!」

回から出た言葉が完全に強がりな事は
レアリア自身が一番わかっていることだった。

たしかに戦い始めた時に
その覚悟はしていた。
しかしいざ実際にその時
となると心は乱され、
頭は冷静でいられない。

『自分はこれから
欲望のバケモノに
初めてを奪われるのだ』

グイッと股間の部分がよけられ
レアリアの未使用の性器があらわれた。

ぬちっ♡ぬちっ♡

性器に擦りつけられる触手が卑猥な水音をたてる。

「や、やるならひと思いにやりなさい！
そんな…そんな触手…そんなモノなんて…
…や…いやっ！こんな…こんなのが初めて…！」



「んぎいつ！」

触手の先端がレアリアの割れ目にめり込んだ。
まだ誰も迎え入れたことの無いそこが
大きく広がり、異形の触手をくわえ込んでいる。

「私の…初めてが…っ」

その光景は少なからぬ衝撃を与え、涙が溢れる。
しかしそんなのは欲獣の知ったことではない。
ヤツらにあるのはただ己の欲望を果たす事だけだ。

ぽんっ

みちゅっ
♡♡♡♡

ぽん

触手が欲望に任せたピストンを始めた。

ふんっ……くう……っ

処女を奪われたばかりのレアリアの性器は
まだ抽挿に耐えられるようなモノではない。

しかし触手から分泌される媚液により
すぐに下半身からは快感が送り込まれる。
つい先ほどまでは異物を排斥するかのよう
に閉じていた柔肉はすぐに迎え入れるよう
な優じゅかつ情熱的な締めつけへと変わっ
ていった。



「んっ♡くぅうっ♡」
責められるレアリアもいつのまにか
その吐息に甘いものが混ざり始めた。

「ごんっ…なの♡きもちよく…なんか♡」
虚しい強がりが口から漏れる。
その割れ目は侵入してきた異物を優しく締めつけ
悦びのヨダレをとめどなく垂らしているのだ。
『性』の欲望の化身が相手では「戦士レアリアの
カラダもただのメスでしかなかった。」



「おっ♡ちがう♡こんなの♡
きもちよく♡なんか...ない♡」
もはや滑稽なほどムダな抵抗であった。

触手が出入りするたびに悦びの体液が
あたりに派手に飛び散る。
ついさつきまで処女だったとは思えない
乱れ様だった。



深く突き挿さった触手の先から
ドロドロとした精液が勢いよく吐き出された。
「あぐっ♡んひい♡」

精液すらも強力な媚薬効果がある。そんなものを体内に吐き出され、レアリアの体はドンドンと敏感になつていく。割れ目と触手の間から、収まりきらなかった精液が勢いよく吹き出した。

欲獣の精液は非常に妊娠確率が高い。
しかしリアリアは特に慌てる素振りを
見せなかつた。。。。

触手が引き抜かれると、ぽつかりと空いた
割れ目から大量の精液が滴り落ちた。
抜けた蹂躪者との別れを惜しむかのように
レアリアの性器はヒクヒクと妖しく蠢いた。
処女喪失からわずかの間ですでに体は
快楽に順応を始めていた。

711

ずろぶ...

「んぎい♡」

「んぎい♡」

ヒッ

おちやつ♡♡♡

비밀

：あれから何十本の触手を受け入れただろうか。
レアリアの股間はぽっかりと開いて
驚くほど大量の精液を吐き出していた。

「…はっ♡はっ♡はあっ♡」
息も絶え絶えなレアリアは、べしかしアレだけ
射精されたにも関わらず妊娠を恐れる
素振りを一切みせていなかった。





「ギ…ギキィ…ナラ…
ベツノ…ホウホウデ…セメルカ…」

「えっ？ いまのはまさか……？」

欲望から生まれ欲望を満たす事だけが
目的のはずの欲獣がべたどたどじくはあるが
喋ったことに衝撃を受けるリアリア。

A stylized illustration of a red garment, possibly a skirt or a piece of fabric, with Hebrew text and hearts. The text includes "יְהוָה" (YHWH) at the top right, "אֱלֹהֵינוּ" (Eloheinu) in the middle, and "שֶׁכְּנִסָּנוּ" (Sheknenu) at the bottom. There are several pink hearts scattered around the text. The background is dark brown.

「ま、まさかそんな…!?」
「オカシイ…オモツタラ…ツウイウコト…カ…」
「今まで…そんな知能があるヤツ…!」

「プロテクト…サレテイルナラ…
ソレヲ…コワセバ…イイダケ」
伸びてきた触手がレアリアの
小ぶりの胸に覆いかぶさる。

「なっ何を…!」

「オマエノカラダ…テツテイテキニ…セメル。
チクビモ、ケツアナモ、クリトリスモゼンブ
カラダジュウノ、アナトイウアナヲ、オトシテヤル」

ガポッ

ギョッ

ヒクッ

ギリッ

ギョ

ギョ

「オマエノカラダ…カンセンニクツプクサセテ…マケラミトメサセレバ…プロテクト…トケル」

「なんつ…!? や、やめて！
そ、そんな事してもプロテクトは
解けるはずが…!!」

ガポッ

ギョッ

ギリッ

ギョ

「ヤッテミナケレバ…
ワカラナイダロウ…?」
「サア…マズハ、オマエノチクビ
カラセメタテヤルツ…」

「クヒツ…クリトリスヨリモ…
ピンカンナチクビニ…シテヤロウ」

「ひっ
や…やめ…」

ギョ

『んひい♡』

「んっ♡こんなもので…っ♡」

「激しく…動くなあ♡んっ♡やめっ♡」

✿

半信

キリッ...

半子

「こんっ♥な…事して…もっ♥
ムダ…んっ♥…なん…だから…あっ♥」

ビクビクと体を震わせながら
強気な言葉を放つリアリア。

ギョポッ

ビクン

ギョッ

ギリッ

ギョ

「ソナコトライト…ズイブン
キモチヨサソウニ…シテイルジャナイカ？」

「誰が…っ♥こんなの…んっ♥
ただ気持ち悪い…あっ♥…だけ…なんだから！」

「ソウカ…ツレジャア…キモチヨクナルマデ
ネンイリニ…ナブツテヤランドナア…？」



「ぶぐっ♡んっ♡」

「一際激しく乳首を擦り吸い
上げられてレアリアは全身を
震わせながら絶頂した。」

グボッ♡
グボッ♡
グボッ♡
グボッ♡

ギリギリ
ギリギリ
ギリギリ
ギリギリ

ギリッ

ギチ

グボッ♡
グボッ♡
グボッ♡
グボッ♡

「はっ♡はあっ♡はあ♡はあ♡」

「チクビデイクノハ…キモチヨカッタカ?」

「はあ♡はあ♡…別に、こんなの
どうってこと♡なかった…わよ!」

「ソウカソウカ…ソレジャア…」

ギキ

レアリアは激しくイッた。
乳首だけを責められ、
本来まだ出るはずのない
母乳を少し噴き出しながら
体を震わせて無様にアクメを
キメたのだった。

「やめでっ♡もうやめでええ♡
 イってる♡イってるがらああ♡
 もう♡乳首ずりずり♡じないでええ♡」

だが触手の動きは止まらない。
レアリアの懇願など意にも介さず
執拗な責めを続ける。

「イぐっ♡またイぐっ♡
イっただがりのなに♡
どまらないっ♡イぐうう♡」

身動きできないまま己の乳首を
舐られて連続絶頂を強制される
屈辱感と、それを塗りつぶすほどの
圧倒的快感……

「やめでっ♡ゆっ♡許じてええ♡
やだ♡もうイヤああ♡やべでええ♡」



。。それからおよそ数十回ほど
乳首アクメをキメてようやく責めは止まった。

「。。はっ♡はあっ♡はあ♡」
覆いかぶさっていた触手が
離れ、レアリアの乳房は
久じぶりに外気に晒された。

むわぁ。。。。

その見た目は、以前の慎ましく
極めて平坦で乳首が控えめに
存在を主張していた頃とは
まるで違うものとなっていた。

吸いつかれイボで磨かれた乳首は
醜く肥大化し天を差すかのように勃っていた。



そしてそれはひどく鋭敏になっており
何もせずただ外気に晒されているだけで
ジワジワと快感を脳へと届けていた。

「あっ……ああ……そんな……
私のおっぱい……こんな……っ」

むわぁ……

さらには本来まだ出るはずの
ない母乳らしき液体を滲ませている
己の乳房を見て、レアリアは嘆いた。

「ナカナカ……イイオッパイニ
ナツタジャナイカ……エエ？」

欲獣がなじってくる。
責めはまだ、始まったばかりなのだ……

ぴく

ぷる

ぷる

アツモ…タツプリト
ホジクリカエシテ…
ヤラントナア…?」
「お、お尻なんて…!」
その言葉にレウリアは
身じろいだ。

「ククツ…シランノカ…?
ケツマンコツテ…イツテナア
マンコヨリモ…コツチガイイ
ツテナツモ…イルンダゼエ?」
股布がグイッとよけられ、
レアリアのキレイな尻穴が
あらわになる。

「そつ…そんなところに
入るわけが…っ!」

「ハイルカ、ハイラナイカ
ジャナイ…イレルンダヨ」
そう言うのとレアリアの腕
くらいの太さをもった
イボ触手がアナルへと
一気に侵入した。

「おひいいいい♡ はっ…♡
入っちゃっ…たあ…♡」
自身から分泌される粘液により
一切の抵抗なく触手はレアリアの
ケツ奥まで一気に潜り込む。

「おっ♡おしり♡へんになる♡
つぶつぶがあ♡おしりのなか♡
ごりっ♡ごりっ♡ってえ…♡」

みちみちみち♡ぶちゅちゅ♡

触手がゆっくりと抽挿を
開始し、粘液でスムーズに
動きながらも隙間なく生えた
イボがケツ穴全体をくまなく
刺激する。

「おつつ♡おほおお♡
やめつつ♡うごかないでええ♡
おしりっ♡おしりダメになる♡
なんでええ♡おじり嬲られて♡
きもちよくなるなんてえ♡」

「キニイッテモラエテ…
ナニヨリダヨ…デモナ…」

「ソコハ『オシリ』ナンカ
ジャアネエんだヨオオ!
『ゲツマンコ』ダツ!
イイカ!? イツデミロ!
『ゲツマンコキモチイイ』
ツテナア!」

突然、ピストンの動きが荒々しくなる。
「おひいいい♡ やっ♡ やめへえ♡
言うつ♡ 言うがらあ♡ 許しつ♡
許しへえ♡ おっ♡ おケツう♡
ケツマンコお♡ ダメになつちゃう♡」

「ぎもちいい♡ ぎもちいいですう♡
げづまんごおお♡ ぎもちよすぎで♡
あだまおがじくなるうう♡」

「イぐっ♡けつまんこホジられて
イっちやううう♡おっ♡おほお
イぐっ♡イぐうううう♡」

イボ触手で初めてケツ穴をホジ
られながら絶頂するレアリア。
「んぎいい♡ケツアクメ♡
止まらないのおお♡これダメ♡
きもちいいの♡止まらない♡」

まん汁・腸液・母乳・よだれ。。。
様々な体液を吹き出しながら
絶頂を貪る。



「ハジメテナノニ…ズイブン
ゴウカイニゼツチヨウシタナ？」
ずるっ…とレリアアのケツ穴から
触手が引き抜かれる。

それは、粘液やら腸液やらで濡れて
テラテラと妖しく光っていた。
「ドウダ？コレガサツキマデ…
オマエフケツマンコノ…オクマデ
カワイガツテクレタ…イボダゼ？」

「そっそんなの…見せないで…」
ぽっかり開いたレリアアのアナル
から触手まで幾筋もの光る粘液が
橋のように糸を引いていた。

ぬちゅ

ちゅあ

あ…

あ…

あ…

あ…

「ゲツマンコラ…イボイボデ
メイツパイホジラレテ…
サイコウニキモチヨカッタロ？」
「そっそんな事なんて…ない！」

「デモマダ…オワリジャナイゼ…
オマエガ…コノシヨクシユヲミル
ダケデ…ケツカラチヨウエキラ
シタタラセルヨウニ…ナルマデ…
テツテイテキニ…ナブツテヤル」

「…ッッッ」
「レアリアの心中とは裏腹に
アナルはその言葉を受けて
ひくひくと期待に蠢いた。」

「おひいいい♡おけちゅ♡
むりい♡もうむりいい♡
だべえ♡ごれいじようはああ♡
めぐれだまま♡もどらない♡」

ぼちゅっ♡ぼちゅっ♡

「おがっ♡おがじくなるうう♡
もうだべえ♡けつまんこ♡
これいじょうホジらないでえ♡」

「んぎひいいい♡おっ♡おっほお♡」

ひととき大きく声をあげレアリアは
ケツまんこアクメをキメた。
その股間は腸液やまん汁などで
乾いた場所がないくらい濡れている。

「……おっ♡おおっ♡おへえ♡」

ズイブント…キモチヨサツウ
ニイツテタジャナイカ…
ケツマンコハ…キニイツテ
クレタミタイデ…ウレシイヨ

「はっ♡はっ♡」
否定したいが
言葉が出てこない。

「はあ…はあ…？」
何を考えてるのか
わからず戸惑う。

ゲドナア…ソシナニ
カラダノズイブンヲ
ダンテタラ…ノドガ
カワイテキタンジャ
ナイノカ…？」

現れたのは先端から何やら
黄ばんだ白っぽい液体を滴らせた
触手だった。。。

コレガナニカ
ワカルカ……？

分かるかと言われても全く
初見のモノなど分かるはずも
なく……しかしその溢れる
液体から漂う匂いは……

「これ……この匂い……
ま、まさか……？」
「サスガ、ヨクワカル
ジャナイカ？」
ソウ……ザーメンだよ。
ソレモ、中毒成分ガ
タップリトフクマレタ
……ナ？」



触手がムリヤリ回の中へと
侵入してきた。

「ぐむう!?ぐっ、おぶえっ♡」

同時に回の中に
溢れ出すザーメン。

「スイブンハ…タイセツダ、
シツカリトラナキヤナァ♡」
「こぼお♡おえっ♡ぐぶっ♡」
ムリヤリ注がれたザーメンは
回を満たし胃に流れ込む。

ビクン

ビクッ

ピクッ

「アア…ヒトツイッテ
オクガ…アマリニアド
ガカワイテルカラッテ
ノミスギナイホウガ
イイゾオ…ソイツハ
セツシュスギルト…
クセニナルカラナァ?」

ずん

フンデルアイダ、ヒマダロウ？
マシコモ、ケツマシコモ、チクビモ
タツプリカワイガツテヤルヨ……」

「ぐもお!!?
んぶっ♡おごっ♡
おぶえっ♡
おごおおお♡」

触手が股間の両穴を嬲り、
極限まで敏感になった乳首を
服の上から焦らすように
刺激してくる。

「ごっ♡おごえ♡
ふぐう♡おっ♡
えおっ♡うぼお♡」



。。注がれたザーメンが胃を
いっぱいにした頃、ようやく
触手が引き抜かれた。

「おっ♡ごぽえ♡
。。はっ♡はあ♡はあ♡」

「ドウダツタカナ。。。？
スコシハ。。。ノドノカワキモ
イエタカネ。。。？」
欲獣が聞いてくるが答えない。
いや、答えられない。

「。。。うぷっ♡おっ♡
ぐっ。。。ふえ♡」
胃に注ぎ込まれたザーメン
で今にも全て吐き出して
しまいそうなのだ。





「オイオイ、ギョウギがワルイゼ？
ハキダシタブン、マタツメコンデ
ヤラネエトナア……？」

再び触手が回にねじ込まれ先端が
喉奥までもぐりこむ。

「おぼっ♡ごぼお♡
おっ♡ごええ♡」

喉奥まで入り込んだ触手の
先端からまたザーメンが
注がれる。

ビクン

「ごぐええ♡ごじっ♡
おぶっ♡ごぶえっ♡」

どぶどぶと注がれる
ザーメンの重さを腹に
ずっしりと感じながら
レアリアは悶えた。



レアリアの腹に散々ザーメンを
注ぎ込んでいた触手が動きを止める。

「うっ……ぶ……おうえっ……」

腹から立ち上る
なんともいえぬ
悪臭が吐き気を
催してくる。

（吐いたら……またムリヤリ
注がれる……耐えなきや！）
今度こそ吐くまいと決意を
固めるレアリア。

ゆっ……くりと触手が
喉から引き抜かれる。
「こっ……おえっ♡」
喉がゴリゴリと刺激
され嘔吐感がこみ上げる。
それでもレアリアは
耐える。

「喉が…刺激されて…っ！
でもこれなら…耐えられる！」

「レアリアがそう思ったその時、
それまでゆっくりと引き抜かれ
ていた触手が突然
勢いよく引き抜かれた。」

「ごぼげっ♡おぼっ♡ごぶあ
げばおおおっ♡♡」

「ごぼりゅっ♡びちびちびち♡」

突然喉を強く刺激され
無様にザーゲロをブチ
まけてしまう。



「オイオイ…マタ ハキダシタノカヨ?」

「はっ♡はあ♡はあ♡はあ♡」

陸に打ち上げられた魚のように
回をパクパクさせ
荒く呼吸をする。

それは短い間に嘔吐を繰り返して
させられた事によるもの……
ただではなく、注がれたザーメン
からの発情効果もあった。

すでにレアリアは
喉奥に触手を挿し込まれ
注がれた生臭いザーメン
を一気に嘔吐するその
行為から快感を得はじ
めていた。

荒く呼吸をするレアリアの口に
またしても触手が荒々しく
突き込まれる。

「ごぼおっ おげっ♡ごげええ♡」

「ハキダサズニ
ノミコメルマデ
ナンドデモ
ソソギコンデ
ヤルカラナア」

ゾリゾリと今までにない程
執拗に喉を刺激しながら
触手が喉奥まで侵入する。

「ごべえ♡おぼっ♡
おごえええ♡ごびよ♡」

再び勢いよく注がれる
生臭いザーメンの重さを
胃にずっしりと感じながら
レアリアは声にならない
叫びをあげた……



：あれから何度も注がれては
吐き戻してを繰り返して、レアリアの
体はすっかりザーメシの味と匂い、
そして嘔吐感に順応し発情する体へ
変貌を遂げていた。

「おごげええ♡ごぼお♡」

げぼお♡びちびちびちっ♡

もう何度目かも分からぬ
嘔吐をしながらついに
レアリアは初めての
ザーゲロアクメをキメて
いた。



「ヨカツタジャネエカ…コレデ
オマエハコノサキズット…
ザーメシニオイデハツジヨウシ、
ゲロヲハクダゲデアクメラキメ
ラレルンダ…」

「はっ♡はあっ♡はあっ♡」
目だけで欲獣を睨みつける。
しかし体は、執拗に股間と
乳首を責め立てる触手と

鼻腔内に充満するザー臭
と先ほどの嘔吐により、
ずっと軽い絶頂状態の
ままビクビクと甘い快樂
に喜び打ち震えていた。

「ドウダ？ソロソロソ
プロテクトヲトキタク
ナツテキタンジャナイカ？」

「誰がそんなこと……！
どんなに、か……体を
弄られたって……お前達
欲獣の思い通りになんて
……ならない！」

「ソレジャア……コツチモ
プロテクトガトケルマデ
スキカッテヤラセテモラウ
トスルカ……」

ぐいっと両脚を開かれるレアリア。

ぱつくりと開かれた脚の間に
ある秘所は先程までの責めに
より様々な汁でグシヨグシヨに濡れ、妖しく光っている。
乳首は服に擦れるだけで蕩けるような快感を与え、回と
鼻はザーメンを受け入れれば発情する……。
その体は段々と正義の戦士ではなく娼婦以下の淫売へ
作り替えられていった……。



触手がレアリアの秘所に伸び、
そこにあつたクリトリスを
むき出しの状態にした。

「ヨコラ、ニドト
カワニヒツコマナイ
ズルムケノムキダシ
ニシテヤルゼ？」

「つんつんと細かい触手が
レアリアのクリトリスを
つつき、こねくり、弄り回し
ていく。」

「♡今更…んっ♡そんなどこ…あっ♡」
「もともと敏感なクリトリスは、度重なる絶頂と
吸収された多量の媚薬のせいでさらに敏感に
なっていた。」



そして現れる変わった先端の触手。
それはその先端でクリトリスを
スッポリと覆い込むと、キュッと
吸い付いてきた。

「んっ♡」
その刺激だけで
レアリアの回から
甘い声が漏れる。

その先端の内部はびっしり
とイボイボが並び、包み
こんだクリトリスを絶えず
不規則な刺激で責め立てる。

「んっ♡…くっ♡はっ♡んひい♡」
「これ…何もしてなくても…あそこ
がジンワリ責められてるうえに…
少しでも動くと…予想できない
気持ちよさが…！」



クリトリスについた触手が
収縮をはじめた。

「あっ♡いやっそれ…ダメ♡」

敏感になったクリを、
ぎゅほぎゅほと擦られ
レアリアは嬌声を上げる。

「やめっ…てえ♡そこダメ
そんな♡きゅほきゅほ
されたら♡おかしくなる♡」

どんなに懇願しても止まらない。

「あっ♡イっ…く♡イクっ♡
ダメっ♡それ以上されたら♡
イクっ♡イクイクイク…ッ♡」



「んっ♡ふぐう♡」

レアリアはいとも簡単にいった。
包まれたクリトリスを擦られ
強制的にイカされた。

女の大事な部分を
一方的に黽られ、
勝手にイカされる
屈辱……

だがそんな事は欲獣には
関係のない事だった。
イッてばかりで敏感な
クリトリスを再び刺激し始める。

きゅぽっ♡きゅぽっ♡きゅぽっ♡

「やめてっ♡イッてる♡イッてるの♡
クリ擦らないでえ♡イッ……くう♡
いったばかりなのに♡またイぐう♡」

びくびくっ♡びくんっ♡
んぐらう♡
連続でイカされる苦痛と屈辱。
だがまだ終わらない。

レアリアがいった事
など意にも介さず再び
触手は収縮を始める。

「アイっ…だぁ♡イぎまじだぁ♡
やめでっ♡どまつでええ♡」

敏感になったクリトリスを絶えず
刺激されて絶頂が続く苦痛。
だが懇願は意味がなく触手の動きに
一切の変化はない。



「アイぐっ♡アイぐっ♡うううう♡」

レアリアの体がビクンと大きく跳ねる。
もう何度目のアクメだろうか。

常にクリを責められ、
もはやアクメをじて
いない時の方が短い
ほどだ。

「おお♡おほおお♡
んぎい♡うんぎい♡」
もう人語の体をなしていない。

絶頂が百を越えた頃、触手はようやく
その動きを止めた。
それでも二度連鎖アクメに陥った体は
すぐには落ち着かなかった。



『…おっ♡んっ♡』

ようやく落ち着いたレアリアの
クリトリスから触手が離れる。

ずっと媚薬を塗りこまれ
ながら刺激され続けた
ソレは、以前と全く違う
様相を呈していた。

醜く肥大化し屹立する様は
さながらオスの陰茎であった。

赤く充血し、様々な汁に塗れて
でらでらと輝きながら小刻みに
震える、イヤらしいメスちんぽが
そこにできていた。



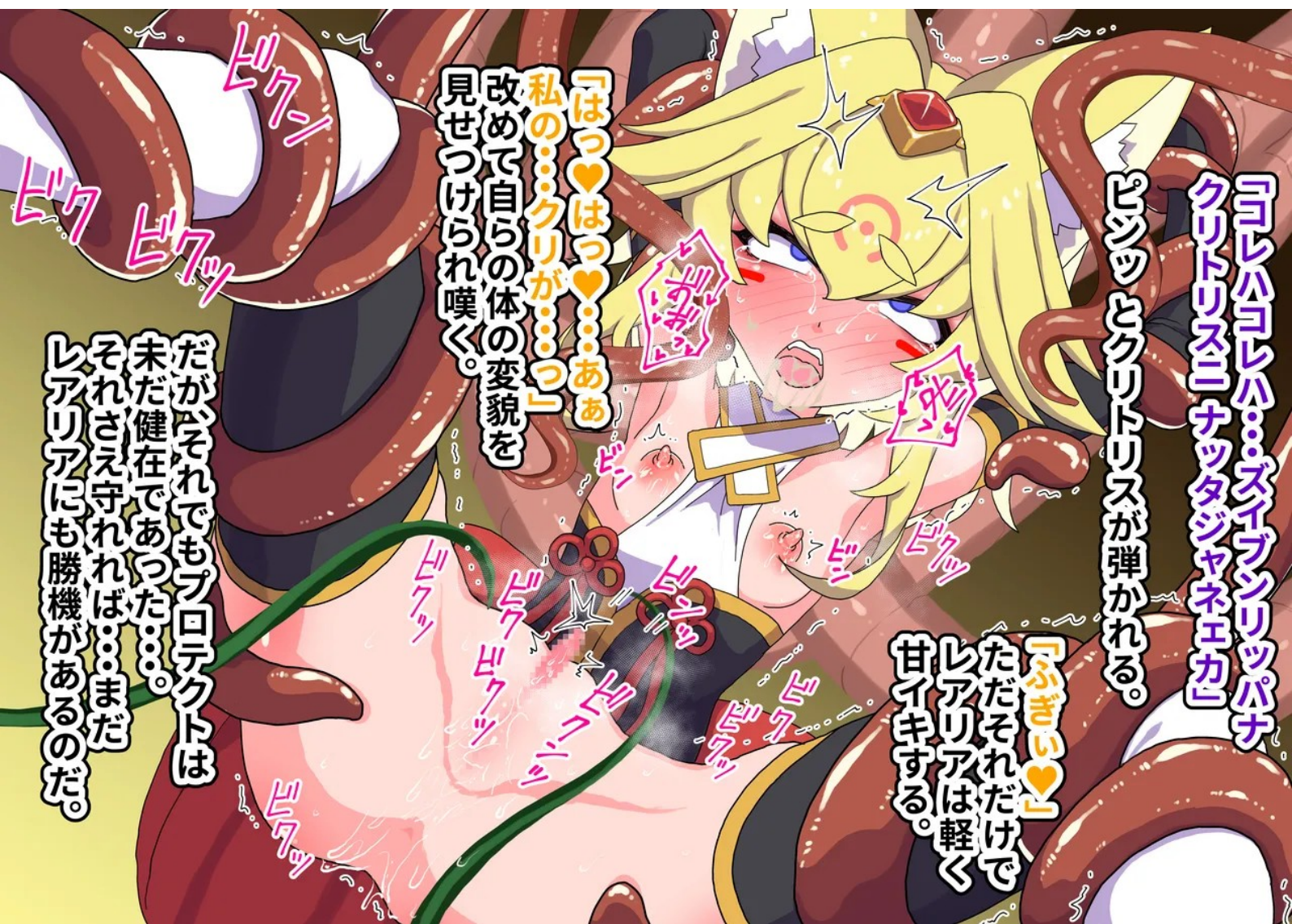
ヨレハコレハ…ズイブンリツパナ
クリトリスニナツタジャネエカ

ピンツとクリトリスが弾かれる。

「ふぎい♡」
ただそれだけで
レアリアは軽く
甘イキする。

「はっ♡はっ♡…ああ
私の…クリが…っ」
改めて自らの体の変貌を
見せつけられ嘆く。

だがそれでもプロテクトは
未だ健在であった…。
それさえ守れば…まだ
レアリアにも勝機があるのだ。



「コレダケヤツテモ…マダトケヌカ」

レアリアは拘束され高々と釣り上げられる。

「カラダハ、モウスツカリオチテルハズ…
マァイイドウセジカンハイクラデモアル」

ギッ…

ギチッ…

ギチィ…

「オマエガジブンノホウカラ
タネツケヲコシガンスル
ヨウニナルマデ…ジツクリ、
ジツクリジツクリト…
チヨウキヨウシテヤルヨオ…」
だが欲獣は見逃していた。
レアリアの体を弄る事に夢中になり
完全に意識の外に行っていたのだ。

レアリアが、その
使い切ったチカラ
を再び回復させる
までにかかる時間
を…。

「油断したわね！
パワーも溜まったし、
一気に全部吹き飛ばしてあげる！」
その四肢と言葉には力が漲り、
固く結ばれた意志は、開発された
乳首とクリからの快樂信号を
押さえ込んでいた。

ドワオツ！

自らを拘束する触手を
全て吹き飛ばし自由に
なるレアリア。

その全力の二撃は
周りを囲んでいた
触手どもを残らず
消滅させた――

。。などという都合のいい事は決して起きなかった。確かに再びパワーを貯めたレアリアは拘束していた触手を千切り自由になり攻撃を放った。

いや、放とうとした。しかしすぐさま触手から立ち昇るザー臭にカラダは勝手に屈服、そのまま再捕獲された。

「なんでえ!? どうしてヨイツに勝てないのオ!」

体は完全に敗北していた。捕まり両穴を撈られながらレアリアの腰は勝手にへこへこと動いていた。



どちゅっ♡ぼちゅっ♡

まるで「逆らった罰だ」とでも言わんばかりに
両穴を犯す触手の動き
は激しくなる。

「おひい♡やめっ♡
激しくしないれえ♡
おっ♡イクっ♡」

「やだあ♡イっちや
ダメなのにい♡
こんな♡みじめな
こと♡ないのにい♡
おっイグ♡イグう♡
まんことケツまんこ♡
どちゅどちゅされて♡
みじめアクメくるう♡」





ぶびゅるっ♡どびゅるる♡

「おんぎいい♡きた
ざーめんきたああ♡
だめえ♡ぎもちいい♡
だずっ♡だずげでえ♡」
両穴にザーメンを
どぶどぶと注がれながら
アクメを繰り返す。

「ちぐびだめえ♡
そこっ♡いじられ
ながらっ♡おほお♡
まんごお♡イジメられ
たらあ♡おっ♡おが♡
おがじくなるう♡
おほお♡ゲツう♡
ゲツまんごおお♡
ぞこもだめえ♡」



体中の穴からあらゆる
体液を撒き散らしながら
レアリアは懇願アクメを
繰り返した。

「アイグっ♡イツグううう♡
戻ってこれなくなるう♡
やべでええ♡もう♡おほお♡
もう許じでえ♡んぎいい♡」

泣いても謝っても
拒否しても強がっても
許しを乞うても
何をしてもアクメ。

「おっ♡んぎひい♡
おへえ♡あひつ♡
おごおおおっ♡」





「お願い……します……
許して……それだけは……っ」

レアリアは理解っているのだ、
今この状態でそんなモノを
受け入れたらプロテクトが壊れる事を。

そしてそれは欲獣も
同じことだった。
ヤメロトイワレテ
ヤメルバカハイネエ

両穴に充てがわれた
触手は小さく往復し
愛撫を繰り返した。

すでに両の穴は受け入れる
準備を整えていた。
グツと力が込められるとその
先端が簡単に穴へとめり込む。
だんだんと割れ目へと侵入
していく二本の触手……

にゃん、うう……

「んくう♡」
意思とは裏腹に
甘い声が漏れる。

ほどなく突き当たりに
たどり着いた。

にゅとんっ♡

そして触手たちは優しく
ゆったりとしたピストンを
開始した。
本気になればこんな物とは
比べ物にならない力強いピストンで
瞬く間にプロテクトを破壊できる。

だというのに触手は
あえて優しくいたわる
ように動き始めた。

完全に弄ばれていた。



「あっ♡やめてえ♡んっ♡
そんな♡あひっ♡優しい♡
動きでえ♡おっ♡責めないでえ♡」
そんな児戯のような動きですら
レアリアの体は十分な快楽を
貪っていた。

「そんなのでえ♡
おまんこと♡けっつ♡
きもちよくなっっちゃ♡
ダメなのにい♡」

「だめえ♡こんな♡
プロテクト破壊の為の♡
んっ♡触手なのにい♡」



ピストンが段々と早くなる。
レアリアはもはやアクメ顔を
晒しあちらこちらから体液を吹き
快楽を享受していた。

にゅっ♡にゅぷっ♡にゅぷっ♡

「負けだらあ♡子宮♡
無防備になっちゃう♡
それダケはあ♡ダメな
はずなのがいい♡」

「んひい♡だめなのにい
でぼぎぼぢい♡おほお♡
負ける♡負けぢやう♡」

「でばおお♡おまんご♡
おけちゅもお♡ぎぼちい♡
ぎぼちいいのお♡お♡」

ドチュツ♡ドチュツ♡

ピストンはいつの間にか
激しいものとなり、腔と
レアリアの理性を剥ぎ落
さんばかりの勢いで動い
ていた。

「ダメええええ♡
もうムリい♡ごわっ
ごわれるう♡プロト♡
ごわれちゃうう♡」



薄く硬いガラスが碎ける様な音と共にプロテクトが壊れた。これで、レアリアの子宮…そして卵子を守るものは無くなった。

そんな絶望的な状況でもレアリアの体は自然と受精の期待に震えた。

「ああ…壊れたあ♡
壊れ…ちやつたあ♡
妊娠っ♡させられる♡
孕まされちゃう♡」



「おひい♡らめえ♡
おまんこ♡ずぽずぽしちや
だめなの♡」
触手が激しいピストンを再開する。

ぽちゅ♡ぽちゅ♡

ちゃゅ♡

レ♡

まんこ肛門はめくれ、
体液が激しく飛び散る。

先ほどまでとは違う
確実に孕ませようとする
本気の種付けピストン
であった。

「おひつ♡まんこイイ♡
ケツ♡おケツもおお♡
ずぽずぽ♡されて♡
ずつとぅんち♡してるみたい♡
イグうう♡こんなのすぐイグっ♡」

「イってもイっても♡
イグのとまらない♡
戻れない♡じぬう♡」

「断続的に潮を吹き絶頂を
繰り返すレアリア。
イグっ♡イってる♡
ずつとイつつてるうう♡」

このままじゃ♡妊娠♡
させられちゃうのにいい♡
でぽおお♡ぎもちいい♡
アグメぎぼちいのおお♡
おっ♡おおおっ♡ひぎい♡
」

「だめえ♡だめだけど♡
ぎぼぢい♡イツグう♡」

「シツカリトオクデ
シャセイシテヤルカラ
チャントハラムンダゾツ」

「おっ♡おひいい♡♡
ぎだあ♡しやせいぎつだあ♡
おひつイグ♡受精アクメいぐ♡
あああ♡種付け射精ぎぼちいい♡
卵子レイプ♡クセになっちゃう♡」

びゅるーっ♡どびゅるるるっ♡

びゅん♡

びゅる♡

「あだま狂うっ♡
ごんなのムリイ♡」

「ゲツう♡ゲツまんこも
妊娠しないのに♡
ザーメン♡どぶどぶ♡
いっぱい注がれてるう♡」

レアリアの膣奥で存分に射精
した触手が引き抜かれる。
両穴からは大量のザーメンが
溢れ、触手との間には幾筋もの
体液が糸のように淫猥な橋を
架けていた。

子宮の守りは破壊され
そこに注がれる大量の
精子…。妊娠は確実だった。

「えひっ♡孕んだあ♡
これ…絶対受精した♡
ひっ♡ひひっ♡妊娠♡
しちゃっ…たあ♡」

しかしそれだけでは終わらない。
先ほど大量に射精されたばかり
の性器目掛けすぐに次の触手が
殺到する。
まだ自らの欲を発散していない
欲獣はいくらでもいた。

穴に詰まったザーメンを
全て掻き出すかの様な
激しいピストンが始まる。

「おおおッ♥またきたあ♥
触手ちゃんぽお♥ずぽって♥」

「おっ♡ほおお♡♡ギダあ♡
追加ザーメン♡びゆるびゆる♡
もう赤ちゃんでぎでるのに♡
追加孕ませ汁♡どぴゅどぴゅギダあ♡
おお♡イグっ♡妊娠アクメイグう♡」

射精を終えた触手が
抜かれるとすぐさま
次の触手が挿いる。

汚い顔で浅ましく受精
アクメを貪るその姿は、
もはや完全に欲獣の
孕み袋であつた。

「またキタあ♡孕ませ触手う♡
おケツも♡おまんこもお♡
ちくびもっ♡クリトリスも♡
どこも全部きもちいいの♡
イグっ♡イグイグイグう♡」

「射精してっ♡孕ませて♡
奥でびゅーっ♡種付け
ザーメンいっぱい♡」

「もうイイのお♡
赤ちゃん♡いっぱい
産むからあ♡」

あれから僅か数日。。。
レアリアの腹はすでに
大きく膨らんでいた。

膨らんだ腹など
意にも介さず
おねだりをする
レアリア。

「おひい♡ちんぽ
触手ちんぽイイの♡
孕みボテ腹もつと♡
ズポズポしてっ♡」

「ちんぽ♡もつと♡
孕みまんこほじくって
くださいい♡」





「おっほおお♡イグっ♡
まんこと♡ケツまん♡
ほじくり返されて♡イグう♡」

「ギダああ♡
ざーめん♡いっばい
ぎだのおおお♡
イグう♡」

触手がビクビクと震え
両穴に大量のザーメン
が注がれ溢れる。

「孕みまん♡に♡い♡ざーめん
いっばいどぴゅどぴゅ♡
されてイグう♡イグう♡」



「うんぎいい♡産ま
産まれるうう♡えへ♡
赤ちゃん♡初めての赤ちゃん♡」

必死にいきむ。
まんこケツ穴から
ドツとザーメンが
押し出される。
そしてまんこの奥
から触手の頭が姿を
あらわす。。。

「ほおお♡んぎいい♡
いま産んであげるから
待っててねえ♡」

レアリアのいきみに合わせ
触手の体がドンドンと産道を
おりてくる。
それはついに外へとその頭を
現した。
それは二体ではなく二匹。。。





それは肉の鎖でレアリアと
繋がっており間違いない
彼女の実の子供だった。

大きな音を立てて
何匹もの触手が
産み落とされた。

ごぼりゅっ♡



「おっ♡おほお♡産まれたあ♡
触手赤ちゃん♡産むのきもちい♡」

「赤ちゃん産んでイクの♡
クセになっちゃううう♡
出産アクメ♡やみつきになる♡」

まんこから臍帯を
幾本もブラ下げて
レアリアは出産の
恍惚に浸っていた。

何体もの触手を同時に
ひり出したまんこは
ポツカリと口を開けていた。

「ビクッ」

「ビクッ」

「ビクッ」

「はっ!」

「ビクッ」

「ビクッ」

「はっ!」

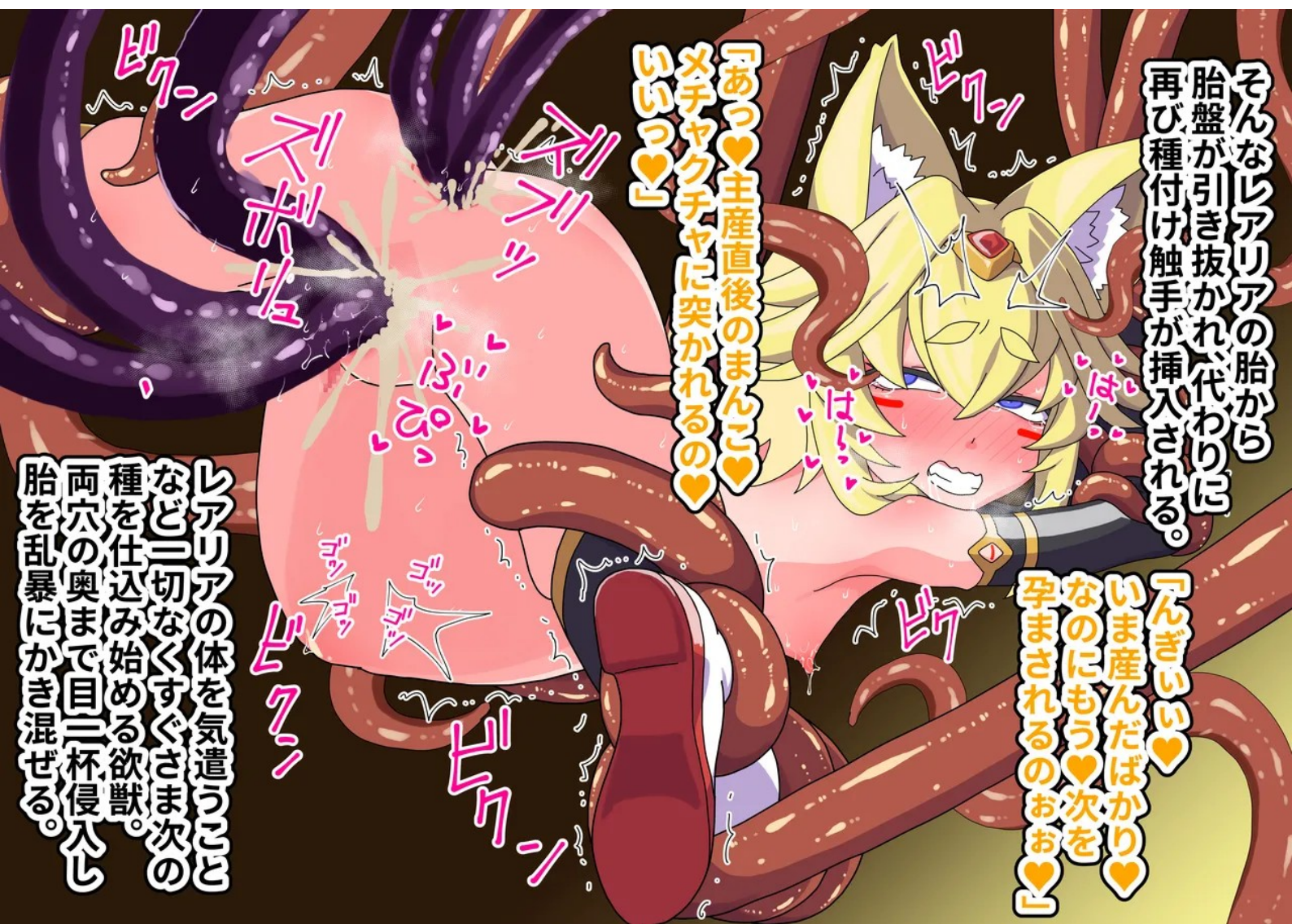
「はっ!」

そんなレアリアの胎から
胎盤が引き抜かれ、代わりに
再び種付け触手が挿入される。

「んぎいい♡
いま産んだばかり♡
なのにもう♡次を
孕まされるのおお♡」

「あつ♡主産直後のまんこ♡
メチャクチャに突かれるの♡
いいっ♡」

レアリアの体を氣遣うこと
など一切なくすぐさま次の
種を仕込み始める欲獣。
両穴の奥まで目三杯侵入し
胎を乱暴にかき混ぜる。



「んごお♡じぬっ♡おながっ♡
やぶれちゃう♡ごんのお♡
ぜっだいむりい♡じぬう♡」

レアリアの腹は
内側から押し広げられ
ぽこぽこ異様な形に
膨らんでいる。

「でもきもちいい♡
出産直後まんごお♡
ドチュドチュされてイグう♡」

もはや何をされてもレアリア
にとつては快楽を得る手段
でしかなかった。



どびゆるっ♡
びゆるるるーっ♡♡

空いたばかりの胎に
ザーメンが注がれる。
それは卵管を通り
卵巣に蓄えられてる
卵子すら溺れさせそう
な量だった。

「おほおお♡種付け♡
赤ちゃんザーメンきたあ♡
孕むう♡また孕むのお♡」

「子宮の中で♡逃げ場のない
卵子♡受精させてるうう♡
受精アクメきもちいい♡
イグう♡種付け受精アクメ
キメてイッグううう♡」



「んおおおお♡触手ちゃんぽ
お胎の中でびゅーって♡」

「また産みます♡
触手赤ちゃん♡
何匹でも孕ませて♡
最後の一個まで
卵子使い潰してえ♡」

「んひいい♡とまらない♡
おせーしとまらないのお♡
イグっ♡またイグうう♡」

その空いた胎にザーメンを
詰め込まれアクメを繰り返す。
その姿にかつての戦士としての
面影はなく、ただ触手の孕み肉が
あるだけだった。。。

